

2010年2月8日発行

Vol.48

ろんど

長崎県音楽連盟事務局

〒850-0056 長崎市恵美須町4-5

NBC第3ビル2F

Tel.&Fax095-820-1081

ホームページアドレス <http://www.n-rond.jp>メールアドレス nma@onyx.dti.ne.jp

中村 亨／調律師〔平成21年11月23日 県民表彰(教育文化功労)授賞〕 (1/14 新年会にて)

魔法の箱

数々のドキュメンタリー番組を手掛け、海外でも評価の高い映像作家・佐々木昭一郎の代表作『四季ユートピアノ』は、次のような言葉で始まる。「4歳、兄のピアノを見た。さわると、ダイヤのような音がお腹に響いた」。ピアノ調律師を目指す、栄子の物語。「音を出すと子どもたちが集まってくる。ピアノは、魔法の箱なのかな」。

30年前の作品だが、今見ても音に対しての鋭い感性で貫かれたその映像詩は、色褪せることがない。その中に、宮さんというこの道50年のベテラン調律師が登場する。栄子の師匠である。二人が雑木林を散歩するシーンがあるが、二人の言葉少ない会話からは、手作りの音のぬくもりと人の心が伝わってくる。

演奏会のピアノ調律師でいつもお世話になっている中村亨さんが、県から表彰を受けられた。長崎県の音楽ホールにあるピアノはもちろん、家庭のピアノ、学校のピアノ、公民館のピアノも中村さんに面倒を見ていただいている。コンサート会場に我々が到着する頃には、いつも調律師を終えられ、にこにこされながら演奏者を迎える。リハーサルにも立ち会われ、音のバランスや、楽器のコンディションについて、いつも的確なアドバイスをして下さり、演奏者からの信頼が厚い。感謝の気持ちを込め、心からお祝いを申しあげたい。

昔から調律師の方には随分と面倒をみていただいた。小学校6年の時、初めて小さなグランドピアノが家に届いた日、私は学校を早退して、ピアノの到着を待った。やがてピアノが運び込まれ、調律師が丹念に音をそろえていくのを、飽きることなくずっと見ていた。個人の家では、グランドピアノがまだ珍しい頃で、私は少しだけ鼻が高かった。

一浪して東京の大学に入った時、G型のグランドピアノを買ってもらった。京浜東北線のある駅からバスで30分ほど入り込んだ、陸の孤島のような小さなアパートにピアノが届く日に、実家の松本でお世話になっていた楽器店から、調律師さんが来てくれた。調律師を済ませ、料金を払おうとすると、入学のお祝いだからといって受け取らない。「伊吹さん、腹減ってないか?」と言って、近くの小さな寿司屋に連れて行ってきて、上寿司をおごってくれた。東京で食べる初めての寿司は、ことのほか旨かった。演奏で飯が食えるようになったら、いつかお礼をしなくてはと思っていたが、私が長崎に来てしばらくたったところに、病気で亡くなられたと風の便りに聞いた。

ピアノは、魔法の箱。中には、白と黒の思い出がぎっしりと詰まっている。 (写真・文：堀内伊吹)